
花の惑星

yz

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の惑星

【Nコード】

N5145U

【作者名】

yz

【あらすじ】

昔々、火星がまだ赤い砂漠だった頃の話。

> i 2 6 6 1 2 — 3 2 6 5 <

昔々、火星に人が住み始めたばかりの頃のお話。

その頃、火星の大地はどこまでも赤い砂だらけで草木一本生えていませんでした。

厳しい自然環境で人が住むにはお世辞にも楽なものとはいえませんし、食糧が足りていませんでした。さらに火星は母なる星・地球から遠く離れているため、地球からの食糧はあまりあてにはできません。

火星に住む者は一人にいくらかの『畑』が支給されました。

『畑』は植物が生育できる土壌で火星に住む者は誰しもある程度自らの力で食糧を得なければなりませんでした。

そんな火星にトムという男の子がいました。

お父さんもお母さんもすでに亡くなっていて一人で暮らしていました。

トムは大変働き者の農夫で一日中ずっと畑で仕事をしていました。

そしてトムの畑の作物は誰よりも多くの実を結びました。

人が「どうしておまえのところはそんなに多く採れるのか」と問いかけると、トムは笑って「植物にがんばってね、って心をこめて話かけて世話をするんだ。そうすると植物は応えてくれるんだ」とはにかみながら小さな声で答えました。

ある日曜日、トムは町のレストランへ行きました。
お爺さんに会いに行くためです。

お爺さんには昔、家族がいましたが飢饉のときに先立たれてしまい、今では一人ぼっちになっていました。

けれどトムにとってはお爺さんが両親のいないトムの親代わりであり、なんでも話すことのできる人でした。お爺さんの方もトムをまるで孫のように思っていました。

そしてこの町の小さな古びたレストランは週末、彼らの食卓になるのです。

トムはいつものように爺さんの向かいに座ると、ポケットから古い雑誌の切り抜きを入れたケースを取り出しました。

そこには地球のオランダという国のチューリップの花畑と水車が写っていました。

火星では見られないような赤や紫、黄色に白と色とりどりのチューリップの花々。後ろには水車が暢気に回り、空はどこまでも清んだ青色をしています。

いつもお守りのように肌身離さず、ずっと持っているため色はあせていました。

けれどトムはそれをいつも宝物のように大事にそれを持っていました。

そしていつもこのレストランに来てお爺さんに地球の花の話をするのです。

しかし、今日は違いました。

「僕、畑に花を植えたんだ」

突然、トムは言いました。

その言葉にお爺さんは驚きました。

「畑は限られているんだ。無駄なものを作ることは許されないよ」

火星の法律で決まっているのです。

ただでさえ食糧がなくて困っていました。

食べられない花を植えたことがバレたらトムがどうなるか想像するだけで爺さんは震え上がりました。
しかしトムは笑って言いました。

「僕は人より多く食糧を作っている。約束された分は作ってあるから大丈夫だよ。今、小さな小さな蕾をつけたんだ。花が咲いたら一番最初にお爺さんに見てほしいんだ。きっとだよ！」
そう言ってお爺さんと約束をしました。

しかし、その年は長く暑い夏が終わるとすぐに秋を通り過ぎ、寒い冬がきました。

ほとんどの畑の作物は実を結ぶことなく枯れてしまいました。
しかも地球では戦争が起り、火星にいつ食糧を送ってくれるのか、皆目見当もつきません。

そんな時、トムの畑の花は咲き誇りました。
色とりどりの花がトムの畑を覆い尽くします。
トムはその美しい花を見て喜びました。

しかしその色とりどりの花を見て人々は怒り狂いました。
食糧を作るはずの畑でどうして花を作るのか、と。
花は皆の足に踏み潰されました。
トムは泣きました。……いつまでも、いつまでも。

そしてトムは皆に取り押さえられ裁判にかけられました。
食糧は人の命になくてはならないものです。
それが足りてない火星では食糧は人命と同等だったのです。
法律によってトムは公開処刑となりました。
公開処刑を執行される前にトムに執行人が問いかけました。

「最後に聞きたい。君の両親も飢饉の時に君に食糧を分け与えて死

んでいったそうじゃないか。

君は誰よりも多くの食糧を作ることができた。食糧は我々にとってかけがいの無いもの。食はやがて命にかわるものだ。それなのになぜ食べることでできない花を植えたのか。無駄ではないのか？」

そうだ、そうだ、と怒号とも罵声ともつかない群集の声がひしめき合いました。

その中でトムは静かに答えました。

「僕は花を見ると優しい気持ちになる事が出来たんです。たとえそれが写真だったとしても。確かに食糧は食べなければ生きてはいけません。食べ物とは命の源に違いありません。そして花はやがて僕らの心になると思いました。僕はお父さんとお母さんの優しさのお陰で生きる事が出来ました。僕が今生きているのは優しさのお陰です。僕はお父さんとお母さんの優しさを皆に感じて欲しかった」

トムの言葉を聞いて、皆沈黙しました。

その沈黙の中で死刑は執行されました。

空には全天一の輝星・シリウスが静かに瞬きながらその様子を見下ろし、地平線の彼方からオリンポス大山がそっと聞き耳をたてていました。

昔々、銀河系一の花の惑星・火星がまだ赤い砂漠だった頃のお話です。

く終わりく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145u/>

花の惑星

2011年10月9日00時06分発行